

【資料】

翻刻・広島文教大学蔵『百人一首麓の枝折』(上)

森 下 要 治

A Reformation of "Hyakunin-Isshu fumoto-no-shiori"

in Hiroshima Bunkyo University (I)

Morishita Yoji

はじめに

本稿は、広島文教大学蔵『百人一首麓の枝折』(以下、『麓の枝折』と略)を翻刻し、本誌に三回に分けて掲載、紹介するものである。今回は、巻頭の序から第二十二番歌注までを掲載する。

『百人一首』は早い時期から注釈的研究の対象となり、室町時代以降、数多くの注釈書が著わされた。こうした注釈書に代表される享受のありようもまた、『百人一首』研究の重要な対象であり、その成果は、例えば田中宗作『百人一首古注釈の研究』や『百人一首注釈書叢刊』等に結実している。ここに翻刻紹介する『麓の枝折』も、江戸時代後期に著わされた『百人一首』を読み解くための注釈的営為の産物である。

書名は、『百人一首』の学習を高い峰と見立て、その麓から道しるべとして枝を折りつつ登るかのとき初学者のための注釈書との意で

あろう。本書序文(叙)に「まだかたなりのうなぬがほとりまづこのはやしをわけそむるならひとそなれりける」(一ウ)、また跋に「いわけなきうま子かためにとて、或人のせちにもとむるかわりなくて、た、一わたりうちおもふま、にかきつけぬ」(六二オ)と記されることなどからもそれが察せられる。その内容から自序と判断されるが、序文末尾の署名「橋頼之」については管見にして知るところがない。

注釈は、契沖や賀茂真淵、本居宣長の説に触れ、それを引用・批判した箇所が間々ある。また、石原正明『百人一首新抄』(文化四(一八〇七)年九月刊)とほぼ同じ内容を有する注釈を積極的に活用していることが明らかで、次に一例を示すように、特に被注和歌の同時代語訳とも言うべき「一首の意は」以下の部分に『百人一首新抄』とほぼ同趣旨の記述が少なくとも六十首以上の注釈文中に見えていることも、本書の特徴を示すものと言える。

『麓の枝折』一〇番歌注

一首の意は、都へゆく人も、都より歸る人も、知た人も、しらぬ人も、關をこゆれば、良てわかれつ、又よりあふ所なれば、これが彼の、逢坂の關の、あふといふ名の意なるかと、疑ひたる也、そのうたかひは、これやこの、やもじにあり、

『百人一首新抄』同右

一首の意は都を出て行人も都へかへる人も知た人もしらぬ人も関行過ればやがてちりくになるものながら又してもく人のよりあふ所なるゆゑこれが彼逢坂の関のあふといふ名の意なるかと疑ひたる也その疑の意はこれや此のやの字にあり

その一方で、十分に文脈を斟酌することなく書写されているために文意不通の箇所も少なからず存する。後掲の【底本略書誌】に述べるように、原本の錯簡もそのままに写すなど正確さや慎重さを欠いており、書写態度は必ずしも良好とは言えない。しかし、そのぶんだけ、

この本がまとめられ、また書写された時期における『百人一首』享受のありようの一隅をよく表すものでもある。

なお、『底本略書誌』に触れるように、六十九番の能因「あらし吹く」歌及びその注を欠く。また、十七番歌注では、「一首の意は」に続く同時代語訳を欠いている。さらに、次に記すように、十五箇所にわたって集付けの不備が認められる。以下の翻字本文では、該当箇所に(ママ)を記して示している(集付けを欠く箇所は除く)。

二十七番 後撰戀五(正しくは「新古今戀一」、以下同じ)
四十四番 なし(「拾遺戀一」)

四十七番 拾遺秋上(「拾遺秋」)

四十九番 詞花戀二(「詞花戀上」)

五十四番 新古今戀(「新古今戀三」)

五十五番 千載雜上(「拾遺雜上」)

五十八番 後拾遺戀三(「後拾遺戀二」)

六十七番 千載雜一(「千載雜上」)

六十八番 後拾遺雜三(「後拾遺雜一」)

八十番 なし(「千載戀三」)

九十二番 千載戀(「千載戀二」)

九十三番 新撰羈旅(「新勅撰羈旅」)

九十六番 新勅撰雜三(「新勅撰雜一」)

九十九番 續後撰秋中(「続後撰雜中」)

百番 續後拾遺雜下(「続後撰雜下」)

注

(1) 昭和四十一年、桜楓社。

(2) 平成三年、平成十一年、和泉書院。

(3) 吉海直人「百人一首抄版本二種の翻刻と解題―幽齋抄と新抄と―」(『国文学研究資料館紀要』第十四号、昭和六十三年三月)所収の翻刻による。

【底本略書誌】

広島文教大学附属図書館蔵、写本一冊。法量は、縦二三・二×横一七・〇糎。請求番号「W911.147/H99」。江戸後期写。全六十二丁。表紙左辺に題簽「百人一首籠の枝折」。文化十(一八一三)年閏十一月二十三日、橋頼之序。また、巻末に著者によるものと思しい跋文があるが、署名等はない。一丁表右下隅に「鷗齋圖書之印」(朱文角印、縦四・七×横一・六糎)がある。百首のうち、六十九番歌及びその注釈を欠く。また、三十二丁裏から三十五丁表に至る部分に、錯簡をそのまま写したことで文意不通となっている箇所が存することから、転写を経たものであることが判明する。また、全体にわたって墨及び朱による補入、読点、濁点、読み仮名等の書き入れがあるが、本文と同筆か別筆か、またいつの時点で書き入れられたものであるか、定かでない。

【翻字凡例】

- ・ 原本の様態ができるだけ正確に伝わるように、丁及び表裏の移る箇所(一オ)(一ウ)のごとく示した。
- ・ 被注和歌の行頭に、『新編国歌大観』所収本による歌番号を付した。
- ・ 注釈文中における被注箇所引用は、ゴシック体で示した。
- ・ 注釈文に引用された和歌・詩・文章等は、前後一文字分を空白にして示した。
- ・ 挿入符号を伴う補入箇所は、「」で括って本行中に示した。
- ・ 明らかな誤写もそのまま翻字し、必要に応じて右傍に(ママ)と注記した。
- ・ 脱文等があることが明らかな箇所には、(誤脱アリ)と注記した。
- ・ いわゆる見七消子は、二重取消線によって示した。
- ・ 補入、読点、濁点、読み仮名等の書き入れは、墨、朱ともに存する

が、煩瑣になることを避けるため、その違いを明示していない。

【翻字本文】

百人一首麓の枝折（外題）

麓の葉の叙

この百の言の葉のはやしはよ、文暦のころ、荒妙の藤原定家のまへつ君は、木立をえらひて、嵯峨の中院になもうゑそめ給ひたりける、其おほみ代には、この前つ君こそ雲かゝる木の高くひで、おほしければ、それやがて、下にちひさす、大宮ぬちかけまくもかしこき御まへをはしめ、こと葉のはやしに入つ人は、世にもにえさにつえもてはやしけんを、つひにあまさかる、ひなの縣、あきしこる、市のほとははさらにもいはず、赤こ（一オ）まのはらばふ田ゐに、いへをらすしづの子より眞木の立荒山中に、しゝねらふあやしがともいたるまでまだかたなりのうなるがほとりまづこのはやしをわけそむるならひとそなれりける、かれくれ竹の節のあひだに此麓の山口をしをりせし人これかれありて、そをことわれるふみ、今なほ傳へ来にけれど、みつ栗の中つころよりこなた、しなどの風のうらぶりて、四方の野山、さわがしきことひさしく、學ひの道もしるへ絶て言の葉の林、ちりつくせるをりなりければ、和束柚山、わづか（一ウ）百木のはやしをだに、ふみまどひて、木のもとますますたどりきつるを、蘆がちる浪速の契沖阿闍梨、あられふり、遠つ淡海の眞淵翁いで、文の苑にいり、筆の林をわけて、山といへば、必雲のかゝらぬ山なく、柚といへば、まさ木の綱（ツナ）はへぬ柚なく、こゝろをすみなはにかけ、おもひをつき日にくだき、遠く行、深くとりて、こゝらの春や木、作なせる斧のたよりに、これの山口をもひらきてむと、前つ柚人のしひことをけづり、ひが言をため、おほとれるかづらははらひおらぬしもとをかりそけて、其もとだちを（二オ）あかさされたれば、をぐらやま、おほつ

翻刻・広島文教大学蔵『百人一首麓の枝折』（上）

かなかりし霧もはれくらぶ山、ふみまどふべくもあらずなもなりにたる、しかはあれど今やよものあらし久しく吹たえ枯にし木のめも春にあふ、御代にあひつゝ、つがの木、いやつぎゝに、石上古言まなびのおこなはれて耳にくだの音の、おとろくことなく、眼は春雲のあかれる世にもおよびぬれば、それは住の江の岸による波立かへり山とりのをろの讀、とりみればうつや手斧の、ほどゝいさをしき、阿闍梨のわざも秀枝の花（ハナ）、橘（ダイダイ）にうとく、飛驒工の墨繩、ひぢ、まさしき、翁（二ウ）のいたつきも、しづ枝の實を、とるにわつらはしく、かつ泉の柚木、ひきまがへるふし、なきにしもあらしかしはたこれが後にも此はやしに入たちて、しもと木の本きりわけむとせし人ひとりふたりあれど、そはまた柚人の、山たつ斧にぶくして中々に手をそこなへるものなりけり、かれ今淺香山、あさきに入たち、言葉のはやしに、落葉かくわらへかためにをりまとへるさねをきり、ひきたがへるかづらをととり、わづらはしきうばらをはらひ、しゝなる苜ねをほりて分やすからんふもとの道の、しをりとはなせるもの（三オ）からあさなゆふなに爪木（ツメキ）こるしつが手業のいとなくてたゞしの道の、たゞしもあへねば峯のしひしば、しひたることやおほからむそはみんな焼鎌のとかまをととりてよくかりそけてな、時は文化の十とせといふとしの後の霜月はつかまりみかの夜折たく柴のほかけにて、たとゝしき筆をとる、

橘頼之（三ウ）

スベテ凡例

- 一 此ちうさくは、もはらいはけなきうひ學びの、耳にき、やすからんことをつとめたれば、大かた俗（サド）び言もてとけり、
- 一 よみ人の氏かばね名所のゆゑよしなども、いはゞいふべけれど、ことのすぢおほく、くたゝしからんをいとひて略（ハツ）けり、そをしらまくほりせは、眞淵の著はせるうひまなびを見るべし、

一 すべてことおほき論アゲツひは略けれど、題のはし詞は、もとつ卷々によりて出せりそはし詞によらずてはうたのこ、ろうまくえかたければ也、

一 よきもあしきもおのがさかしらをくはふべきにあら(四オ)ねは、すべて本のま、にもせりされと假字のみ□(一字虫損)正しきいにしへによれり、

一 歌、ことに清スはすむ、濁ニるはにこるとしるしせるは、うなむはなりが口に、ひがうかべせんことをおそれてなり、おほらかに見えすぐしぞ、

一 句ごとにとけると、一首の意をとけるとにこれかれ詞のたがへるあり、そは相てらしみて意得へし、(四ウ)

百人一首

天智天皇 後撰秋中 題しらす

1 秋田のかりほの庵の苦をあらみ我衣手は露にぬれつ、

かりほは、假庵カライホを約めたる也、かりほの庵のとつぎきたる詞に、人々の論ひもあれと、さまではあらじたゞ重ねたる辭と見すぐすへし、さてそのかりほの庵は秋田の稲を、鳥けものにあらせじとて、守るもの、居小屋也、苦をあらみは、苦があらさの意、みもじは俗にさといふ詞にあたる、假初にふける屋ねなれば、とまの編目があらしくしき也、我衣手は、我袖也、露にぬれ(五オ)つ、は、つゆにぬれながら、又ぬれてなどいふにおなじ、すべてつ、留のうたは、云々としてといひさして、残りの心をふくめたるもの也、一首の意は、秋田守 假いの屋ねの、苦のあみめかあらしくしきに、わか袖は露にぬれて、よもすからわひしきと也、民をあはひおほしめす御心より秋田かる賤が身になりて、よませ給るなるべし、うたにはあま

山賤が手業をみても、それが身になりてよむが、いにしへの常也、さて此うた、天智天皇の御うたならぬ、ことはあきらかなれといまはいにしへ學びさかりにて、ははかりのことは誰もく(五ウ)よくわきためて、まどふべくもあらねば今はそれがまにく、た、うたの意をとかんとぞよ、なほつぎく皆しかり、はた此まきなどは、さまでくさく論ふはかりのものならじかし、

持統天皇 新古今夏 題しらす

2 はる過て夏きにけらし白たへの衣ほすてふあめのかく山

夏ツキきに(けらしの)けらしは俗にらしひ、又さうなといふ程の詞にて、きたらしい、来たさうツキなツキの意也白妙は衣といわん枕詞、ほすてふは、ほすといふ詞の約りたるにて、御まへの人たちの、あめのかく山に、ころもほしたりと、(六オ)いふをさこしめしたる趣也、一首の意は、いつしか春もすぎて、夏は来たさうなかく山に、白たへの夏衣をほしたりと、人々が申すと也、此うたほすてふの詞いかゞ、万葉には、はる過て夏きたるらじ白妙の衣ほしたりあめのかく山、とあり、かくてそよろしき、されど今は本のま、をたすけてとけり、

柿本人麻呂 拾遺戀三 題しらす

3 あしひきの山とりのをのしたり尾のなかしくし夜(を)ひとりかもねん

足引は、山の枕詞山鳥は尾のなかき鳥なり、そか中にも、したり尾とて、甚ながき尾のあれは、そをとり(六ウ)てながくしといはん序とせり、すべて序といふは、次の詞へいひかけん、料にまうけたるのみにて、哥の意にはあづからす、ひとりかもねんは、ひとりねんかと也、もは、かろくそひたり、かもねんの下へめぐらして、心得べし、ある人、ひとりかもと、

しばらく切て、**ねん**とよむべしといへるはよし、一首の意は、
此ながくしきあきのよを、おもふ人とふたりはあらでたゞひ
とりねんかと也、語の勢ひにてうらみたるこ、ろもこもれり、
山ノ部ノ赤人 新古今冬 たいしらす

4 たこの浦にうち出てみれば白妙のふじの高ねに雪はふりつ、(七才)
うち出てみればの、**うち**は、發語なり、發語は、詞のおきなひ
にいふのみなり、ふりすてかきわけなといふ、ふり、かき、と
おなし、**白妙**は、衣にいふがもとにて、白きにも転しいへり、
こ、は句を隔て、**雪はふりつ**、へかゝるなるへし、かにかく此
うたおだやかならず、一首の意、田子のうらへ、たち出てみ
れば、ふじのみねに、雪がふりつもりて、絶景なりと、ありの
ま、によめる也、万葉集には たこのうらうち出てみればま
しろにそふしの高ねに雪はふりける、とありかくてぞ、心こ
とば高くみやびかなり、

猿麻呂大夫 古今秋上 是貞のみこの家の哥合のうた(七ウ)

5 おく山にもみちふみ分なく鹿のこゑきく時そ秋はかなしき
おく山にの、には、にての意、**もみちふみ分なく鹿**のは、鹿が
もみちをふみわけてなく也、**こゑきく時**そのぞもし、力あり、
心とめて味ふべし、一首の意は、秋はもの、哀れなる時なり、
又そのあきの中にも、おく山にておちばふみわけて、鹿のなく
九月の末つかたが、ことにはれにかなしくおぼゆると也、古
今集にてはよみ人しらずのうたなり、

中納言家持 新古今冬 たいしらす

6 鵲のわたせるはしにおくしものしろきをみれば夜ぞ更にける(八才)
鵲のわたせる橋とは二の星あふ夜に、鵲か羽うちかはして、橋
をつくりて天川をわたすといふはしの事を、**おく霜のしろき**と
いはんに、似つかはしければ、その料にまうけたるものなるべ

し、此うたむかしよりくさくさの説あれど、皆よくもあらず、
或人のいはく、上二句は、ひろく空をさしていふとみるべし、
一首の意は、大空さえわたりて霜のおくべきけしきをみればも
はやよが更たるかとよめる也、詩に 霜满天 などいふとおな
じ、といへり此説契沖の説に似て、今すこしおだやかなりとお
ほゆ、(八ウ)

安倍仲麻呂 古今羈旅 もろこしにて月をみてよめる

左註このうたはむかし仲まろを、もろこしにものならはしに、
つかはしたりけるに、あまたの年をへて、えまうでござり
けるを、この國より、またつかひまかりいたりけるに、(誤
脱アリ)めいしうといふ所の海べにて、かの國の人うまの
はなむけしけりよるになりて、月のいとおもしろくさし出
けるをみて、よめるとなん、かたりつたふる、

ものならはしは、學問させに遣したる也年をへて、もう
てござりけるは、幾年もえ歸朝せざりし也、たぐひて
は、うちつれて也、**馬のはなむけ**は、饑別也、

7 あまの原ふりさけみれば春日なるみかさの山にいでし月かも(九才)
天の原の、原は、野原、うな原、などの原にて、廣き所につけ
ていふ詞也、**ふりさけみれば**、遙に見やりたる也、**春日なる**
は春日にある也、**出し月かも**は、出た月かとうたがふ意也、一
首の意は、大空を遙に見放れば月おもしろうさし出ぬ、この月
は、むかし古郷にてみなれつる、三笠山から出し月にてあらん
かと也、いにしへの歌はことたらぬやうにてあはれふかし、
喜撰法師 古今雜下 題しらす

8 わか庵はみやこのたつみしかぞすむよをうち山と人はいふなり
都の辰巳は、京より辰巳の方、遠からぬ宇治山といふ意(九
ウ)なるへし、しかぞすむは、俗にかやうにすむ、又此通に住

といふに同し、世をうち山は、世をうきといひかけたなり、一首の意は、我すむ庵は、京より辰巳のかた、遠からぬうち山なり、外の人は、此山に住ては、都がちかきゆへ世のうきことが、常にきこえて、なを住うきといへど、我は此通り、久しう住て居るといへる意か、又は我は都の辰巳なる宇治山に庵をむすびて、かやうにおもふことなくすみて居るを、世の中は憂きものぞくと、人はいふなりとよめるにもあるへし、詞つかひかすかにて、たしかには聞取がたし、古今集の序に、此人のうたを（一〇オ）判て、はじめ終りたしかならずといへるも此故にやあらん、本居ノ宣長、古今集の注にいはいはく、余材抄に他人は山の名を、うち山となづけてといへるはたがへり、打聞もなをわろし、さて都の辰巳ともしいへるは、京の遠からぬよしにいへる詞也、さるをむかしより、そのこゝろを得たる人なき故に、此詞いたつらになり、また四の句をも、たしかに説〔え〕さる也、四の句は、京ちかき故に、なほ世のうき事のある山といふ意に、いへかけたる也といへり、

小野小町 古今春下 だいしらす

9 花のいろはうつりにけりないたづらにわがみ世にふるながめせしまに（一〇ウ）

うつりは、うつろふと、おなし詞にて稍より地におちちるを、いふがもとにて色のかはるをも転しいふ也、けりなのは、嘆息の詞にて、よきあしきにつけ、心に切におもふ時ためいきをつく聲也、いたづらには、俗にむだにといふにあたりて、爰にては、花を一たびもえ見ずといふ意になる也、わか身世にふるは、世のうきことにか、づらひての意にて、ふるは、雨の縁語也、ながめせしまには、ものおもひをしてをるまにといふに、長雨をかねたり、物おもひある時は、おのづから、空うち

まもらるゝものなれば也、一首の意は、世のうきことに、か（一一オ）つらひて、何くれとものおもひをしてをる間に、うちつゞき長雨がふりて、いたづらに花をちらせしとをしめるなるべし、或人此言は、花は一首のしたにて趣意は身の老衰をなげきたる也、古今集に、春の部にいりしになづみて、花をおもくとくは強説なりといへり、いかゞあらん、今はおのがおもふ所をいへり、とるとらぬは人のまに、古今集の注に、宣長のいへる、世にふりとは、男女のかたらしするをいふ、男女の中らひのことを、世とも、世ノ中とも、いへる多し、古今集のうたにもこれかれあり、（一一ウ）伊勢物語に、世こゝろつける、源氏ものかたりに、まだ世をしらぬなど、あるたぐひも是なりとて、此哥の四ノ句の注にも、つれそふてをる、男につきて、心くるしきことありて、云々と、説り、されは、世、世ノ中とあるをことごとく男女の中らひの意とせん時は、たかふことあり、うたによりて辨べし、こは宣長一わたりの論ひなるべし、

蟬麻呂 後撰雜一 あふさかの關に庵室をつくりてすみけるに、行かふ人をみて

10 これやこの行も歸るもわかれつ、しるもしらぬもあふ坂の關

これやこのは、これが彼の、云々かといふ意也、このは、かの、意（一二オ）なり、このは、かの、意也、此外にも雅言には、かのといふことを、このといへる例多し、さてこの、これとさす所は、往來の旅人也、かのは逢坂の逢といふ人か、る、ゆくも歸るもわかれつ、は、關をこゆればおのがし、こゝろにわかれちるをいふ也、句をへだて、五の句のあふといふ詞へつゞけり、しるもしらぬもは、知た人もしらぬ人も也、あふさかの關は、わかれつ、あふとつゞく意也、今わかれ

てはといふは誤也、後撰集にも、つゝとあり、一首の意は、都へゆく人も、都より歸る人も、知た人も、しらぬ人も、關をこゆれば、良てわかれつゝ、又よりあふ所なれば、(一二ウ)これが彼の、逢坂の關の、あふといふ名の意なるかと、疑ひたる也、そのうたかひは、これやこの、やもじにあり、さてちなみにいふ、これやこのと、これぞ此とにいさ、かけぢめあるを、初學ひのほどの人は、ともすれば、よみひがむめり、是ぞこのといふは、これが彼の、云々ぞといふ意、これやこのは、これか彼の云々かと、いふ意なり、

参議臺 古今旅 おきの國へながされける時船にのりて出たつとて京なる人のもとにつかはしける

難波のうらより船にのりて出たる也

11わたの原ナやそしまかけてこき出ぬと人にはつげよあまの釣舟(二三才)わたしは、海の名、原は、あまの原、野原などの、原也、やそしまは、数多カヌホくある島、かけては、俗にむけといふに同じくて、やそしまの方を、さしてこき出るといふ意也、人にはつげよは、京の人につげよとなり、一首の意は、ゆくさき遠き海原のやそしまさして、今こき出ぬると、京なる人につけて、くれよ、あとへ歸るあまのつり舟(よ)と也、

僧正遍昭 古今雜上 五節の舞姫をみてよめる

十一月、豊明節會とて臣下に、酒宴を給はる儀式あり、其時、公卿、國司、などより、舞姫を奉りて、まはすこれを五節の舞といふ、天武天皇よしのおはしまし、時御琴を遊しけるに、天女くだりて、五度袖をひるがへ(したること)(二三ウ)あり、これ五節のはじめなり、

12天津風雲のかよひち吹とちよをとめのすかたしはしとめむ
天つ風は、空ふく風也、つは、おきつ、わたつ、などの、つな

翻刻・広島文教大学蔵『百人一首籠の枝折』(上)

り、雲のかよひち吹とちよは、「雲」吹あつめて、天女がかよひ道ふたげよと也、一首の意は、天津をとめ舞のすがたのあかづをしければ、空ふく風よ雲間の道を吹とちて、天女が歸ら「れ」ぬやうにせよ、今しばしとめおきて立まふすかたをみてしかなとをしむ意也、内裏を、天上にひとしく申すは常なれと、此うた、けだし、天武天皇の御時の、天女がことを、おもひてよめるか(一四才)ともおもへり、古今集に、良岑宗貞とあるは、俗の時の名也、

陽成院 後撰戀三 釣殿のみこに

光孝天皇、皇女、綏子内親王は、釣殿院と申所に、おはしまし、ゆへ、釣殿のみこと申、みこは、男女にかきらす親王をさして申す

13つくはねのみねよりおつるみなナの川こひぞつもりて淵となりぬるつくはねの、ねは、みね也、峯よりと、つゞくは、そのみねよりといふ意にて重ねたる御詞歟、みなナの川とある川の下にこくとといふ詞を、そへて意得べし、淵とは、水の深き所をいふなれば、戀のこゝろのふかきをたとへて、(一四ウ)戀の淵ともいふ、一首の意は、筑波山のみねより、したり落る水がはしめはわづかなれと、すゑは積りて、みなナの川といふ川になれることく、はしめはつかに、おもひそめし心か月日つもりて、淵の如く深くなりしとよませ給へるなり

河原左大臣 古今戀四 たいしらす

14みちのくのしナのふもぢすり誰ゆへにみだれそめにし我ならなくにもぢすりは、もちこし摺也、あるは山あり、あるは紫などもてさまざまのもやうするをすり衣といふ、その模様、いたくみたれたるものなれば、句をへだて、四句の(一五才)みたれんといはん序とせり、さてみちのくのとしもいへるは、かしこ

よりすりいだせるは、ことに世にもてはや〔せ〕しなるへし、
 誰ゆへにしは、外の人ゆゑ也、みたれそめにしは、戀にこゝろ
 が亂そめし也、我ならなくに、は我にはあらぬに也、にといひ
 さしてつれなき意を、ふくめたるてにをは也、一首の意は、誰
 ゆゑに心をみたさうぞ、君ゆゑにこそ、おもひみたれそめた
 れ、それにかくつれなくすぐし給ふよと、うらみたる也、その
 うらみは、なくにのにもじにてきこゆる也、さて此もぢすりの
 こと加茂翁の説はいとわろし、古今集打聞、伊勢物語（一五
 ウ）古意、などを見て石岡うたかふことなかれ、又信夫郡なる
 石もてするるといふ説は、をさなきつくりこと也、
 光孝天皇 古今春上 仁和のみかどみこにおはしましける時に
 わかれたまひける御うた

また親王と申て天子にならせ給はさりし時也

15 君がため春の野に出てわかなつむ我衣手に雪はふりつ、

君といふは、上なる人にも、下なる人にも、ひろくいふ詞也、
 こゝは俗に、足下などいふ程にあたるべし雪はふりつ、の、
 つゝに、寒かりし勞をこめさせたり、一首の意は、そこもと
 へ、贈らん爲春の野に、わかな摘に出たれは、わが袖（一六
 オ）に雪がふりかゝりて、さてくさむきめをみましたとなり
 かく御心ざしの深きほどを、のたまふが、上つ代の真心也、今
 の世の人は、いにしへのうらうへ也、

中納言行平 古今離別 題しらす

行平の卿因幡守になりて下るとてわかれによまれたる也

16 立わかれないなばの山のみねにおふるまつときかば今かへりこん
 立わかれ行といふに、因幡の山をかねたり、おふるは、はえて
 ある也、まつとしの、しは、助辭、さて松に、待をいひかけた
 り、今歸りこんは、俗に直にといふ意也、一首の意は、けふ立

わかれて、いなばへゆけどみやこにて、（一六ウ）まつときか
 ば、たちまち歸り来んと也、

在原業平朝臣 古今秋下 二條ノ后東宮の御息所と申ける時御屏
 風に立田川に、もみちながれたるかたを、かけりけるを、題
 にてよめる、

后と申は、天子の御本妻也、東宮の御息所とは、春宮を
 うませ給ひし其御息所といふ意也、申ける時とは、いま
 だ后にた、せ給わぬ以前、春宮をうませ給ひたれば、そ
 のほとを、世に春宮の御息所と申せし也、此御息所の御
 事、世人久しくあやまりて、東宮の御妻のこととのみお
 もひ来れり、源氏物語などにも御息所は、東宮の御母公
 を申せるにそれをしも、なほ疑ひこし（一七オ）を、ち
 かき比本居宣長はじめて、そのまどひをはるけられたり
 けり

此論ひ玉勝間にくはし

17 ちはやぶる神代もきかず立田川からくれなゐに水くゝるとは

ちはやぶるは神といはん枕詞、神代もは神代にも意、くれな
 ゐは呉藍也、そを又からくれなゐといふては、ひとつ言の重れ
 るやうなれどすべて世にめづらしきものは、何にてもこの比も
 はら、から何といひし也、唐衣、唐匣、などのたぐひ也、水
 くゝるはもみちのむらくに流るゝを、くゝり染にいひなした
 る也、令式などにも見えて、纈纈といへる是なり、今しほり染
 といふもの也、一首の意は、（一七ウ）【以下の注、欠】

藤原敏行朝臣 古今戀一 寛平ノ御時きさいの宮の哥合の歌

18 住のえの岸による波よるさへや夢のかよひち人めよくらむ

上の二句は、よるといふ言をかさねて序とせり、よるさへや
 の、さへは次の句へめぐらして意得へし、夢のかよひちさ

〔へ〕やの意也、夢のかよひちは、女のもとへ行とみる、夢の中の道也、一首の意は、晝まかよふにこそ、人目を憚るべけれ、夜の夢にかよふには、誰しるべくもあらぬを、その夢にさへ、人目をよけ憚るやうにみるは、いかなる事ならんと打なげく也、(一八才)

伊勢 新古今戀一 たいしらす

19 浪速がたみじかき蘆のふしのまもあはて此世をすぐしてよとや

蘆は、ふしの間ももとより短きものなるに、みじかきあしのとしもいへるは、いよ、詞のいきほひをそへたつ爲なり、さて上二句は序也、ふしの間は、いさ、かの間也、すぐしてよとやは、すぐせといふことか也いひさして、あはでは、堪がたき意をふくめたり、一首の意はつかのまもあはてはえあらぬものを、あはて此世を、すぐせといふことかと、人のつれなきを、うらみたる也、

元良ノ親王 後撰戀五 事いてきてのち京極(一八ウ) 御息所につかはしける

事いできてのちは、心かよはし給へることの、顯れし後也、

20 わびぬれば今はたおなじ難波なるみをつくしてもあはんとそおもふ
わびぬれば、こゝは、こと顯はれて、いよ、逢かたくなりたるを、歎きわぶる意也、今はたおなじは、今は又いづれにするもおなじといふ意、身をつくしてもへかけてみるへし、難波なるは難波にある也、みをつくしは、標滞にて、船路のしるしに立たる木也、そを身を盡すによせたり、一首の意は、かくこと露顯て、なげきくいたるうへは、として身をつくすも、かくしてみをつくすも、同じ(一九才)ことなれば、互に身をなきものにして、逢んとおもふとの意なり、

素性法師 古今戀四 題しらす

21 今こむといひしばかりに長月のあり明の月を待いでつるかな

今来んとは、俗に、後ほど、又追付と、いふにあたる、長月の有明の月は九月の廿日過の月也、一首の意、今ゆかんといひおこせずは、かくまてはまつましきを、今こんとたのめつるゆゑ、まちにまちて、此よのながき九月の末つ比の、有明の月さへ、待出つるかなとこぬ人をうらむ也

博多 文屋康秀 古今秋下 是貞のみこの家の歌合のうた(一九ウ)

22 吹からに秋の草木のしをるればうべ山かぜをあらしといふらん

吹からには、俗にふくとそのま、といふ意、しをるれば、風にもまれてしをる、也、今しほどかくは誤也、うへは、諾の字にあて、うけがふ意の詞也、俗に成程がてんが行た、又尤なことしやなどいふ程の意、あらしといふらむは、嵐を、令荒にとりなしたり、もじの意にはあらず、一首の意は、嵐がふくと、其ま、草も木もみなしをれたり、げにかやうに木草をあらすものなれば、世にあらしといふならんと也、

(以下、続く)

— 二〇二三年九月二十五日 受理 —